第６章 現在の吉野川の環境問題とは

ポイント：
いつも変わらないようにみえる吉野川ですが、吉野川の自然環境は日々変化しています。河川の環境は、常に消失と再生を繰り返しています。しかし、吉野川で本来みられない現象や生物が、近年見られるようになりました。本来の可逆的な吉野川の環境は、元に戻らない一方向の変化をし始めたのです。

６－１ 外来種の繁茂

吉野川では、近年多くの外来種が見られるようになりました。その多くは、人為的に持ち込まれた動植物です。このような外来の生物が、吉野川に昔からみられる動植物の生息・生育場所を奪い始めています。

吉野川では、外来種が分布する面積が拡大しています。吉野川でみられる外来種には、草本類のキシュウスズメノヒエ、シナダレスズメガヤ、セイタカアワダチソウ、セイバンモロコシ、タチスズメノヒエなどがあります。木本としては、ハリエンジュが近年急速に分布を広げています。

メリケンカルカヤ
（イネ科の一年草）

北アメリカ産の帰化植物です。日本へは１９４０年頃に渡来したといわれています。主に、日の当たる乾いてやせた地に群生します。
高さは８０ｃｍほどになります。

タチスズメノヒエ
（イネ科の多年草）

南米原産の帰化植物です。１９５８年北九州市の海岸埋め立て地に旺盛な発育をしているのが見出された。
高さは８０～１４０ｃｍほどになります。

セイバンモロコシ
（イネ科の多年草）

地中海沿岸原産の帰化植物です。１９４３年に千葉県で記録が残っています。戦後急に広りました。牧草とされていますが､若葉はときに青酸を含み､家畜の中毒症状をおこすことがあるといわれています。
高さは、８０～１８０ｃｍほどになります。

セイタカアワダチソウ
（キク科の多年草）

北アメリカ原産の大型の帰化植物です。初渡来期は明らかではありませんが、第二次世界大戦後に急激に分布域が広がりました。都市近郊の空き地、荒れ地、休耕田、堤防、路傍などに群生し､非農耕地の雑草となっています。他の植物の生育を阻害するアレロパシー（他感作用）物質を分泌します。
高さは２～３ｍになります。

シナダレスズメガヤ
（イネ科）

南アフリカ原産の植物です。戦後、砂防用として植えられたのがもとで、全国に広がっています。
　高さは６０～１２０ｃｍになります。

キシュウスズメノヒエ
（イネ科の多年草）

熱帯アジアから北米・中米に広く分布します。１９２４年に、和歌山県で確認されています。水辺の湿地や浅水中にしばしば広大な群落をつくります。
　高さは２０～５０ｃｍになります。

ハリエンジュ
（マメ科の落葉高木）

　北アメリカ原産。日本へは街路樹用に明治時代初期に輸入され、その後各地の海岸や山の崩壊地で、砂防用や肥料木として植林され、野性化もしています。
　高さは１０～２０ｍになります。

植物だけではありません。吉野川の中には、本来生息していないオオクチバスやブルーギルなどの外来の魚が、近年確認されるようになりました。

オオクチバス
（バス科）

別名、ブラックバスと呼ばれています。北アメリカ原産の外来淡水魚です。１９２５年に神奈川県芦ノ湖に放流されました。１９７０年以降、ルアーフィッシングの流行とともに、全国各地の湖沼に人為的に放流され、日本全国に広がっています。

湖の沿岸部や池、河川の中・下流にもすんでいます。

エビ類などの甲殻類、ハゼ科の魚類、水生昆虫などがまず食べられ、次に遊泳力の弱い小型のコイ科魚類が食べられる傾向にあります。

５～７月に水草に囲まれた砂底に、雄が巣をつくり、稚魚を保護します。

食害魚として問題になっています。

ブルーギル
（バス科）

北アメリカ中央部、東部原産の外来魚です。１９６０年にミシシッピー川魚のものが水族館に持ち込まれ、日本で繁殖したものを静岡県の湖に放流したのが全国に生息地が広がる最初です。

流れの緩やかな水草の繁茂する水域を好み、数匹から数十匹、時には百匹単位の群れで行動することもあります。水生昆虫、甲殻類、他の魚の卵、稚魚を食べ、水草の破片や人間の残飯類まで、何でも旺盛に食べます。

６－２ 竹林

吉野川の竹林は日本一美しいと賞され､水辺の竹林は吉野川を代表する風景でした。
美しい竹林を守るためには、人為的な管理が欠かせません。

かつて吉野川の両岸には、竹林が連なり、徳島本線は美林に沿って走る鉄道として有名で、その美しさは日本一と賞されていました。竹林は、水害防備林として人為的に植えられたものです。竹林以外にも、ケヤキやエノキなどの木が植えられました。

藩政時代には、河川敷内の竹林は、主に藩が所有していました。生産力が高い竹林は藩が直営で管理していましたが、村人が藩に願い出て、共同で管理した薮もありました。明治以降、竹の無い沿岸に竹林が造成されました。大正時代には、県が補助金を出して竹林の造成に努めたこともありました。しかし、戦後の食料難の時代に、岩津から下流の竹林はその多くが開墾され、畑になりました。また、昭和３５年から４５年頃にかけて、徳島県下で、いっせいに竹が開花し、枯れ死する現象が発生しました。岩津より上流でそのまま竹林跡を放置したところでは、竹が再び生え始め、現在も竹林をみることができます。

人為的に管理された竹林は美しい景観を作り出します。しかし、管理をしないでそのまま放置した竹林は、竹が倒れ、竹林内に人が足を踏み入れることも困難な状態になります。

暗い竹林

明るい竹林